

大村港入港、復員手続を完了(傷病証明書その他下附)。身体検査後、無料切符、旅費をもらい、八日帰郷の途につく。

比島マスバテ島

泉部隊一衛生兵の生還

岐阜県 瀬ノ上 尹 男

私は大正十一年七月八日、岐阜県大野郡清見村大字牧が原で生まれました。父は農業、母は健在、兄は昭和十年中支へ、それから仏印へと長い軍務でした。私は次男、三男六女の兄弟でした。大野郡大八賀役場に勤め、養蚕の指導員をしていたため村の囑託となり、各役場を転々としていました。

戦争も激しくなり、兵隊になることは覚悟をしていきましたが、昭和十七年徴集兵として甲種合格となり、昭和十八年三月一日現役兵として、歩兵第六十八連隊補充兵(岐阜市)中部第四部隊に仮入営しました。同

日、独立歩兵第十二連隊(第二十六師団―泉兵団)要員として岐阜の兵舎におり、三月十四日下関を出帆し(釜山上陸、十六日鮮満国境、十七日滿支国境(山海関)を通過、十八日独立歩兵第十二連隊第一中隊に編入したのです。駐屯地河北省滄県で一期の教育を受けました。

歩兵教育を受けている途中で試験があり衛生兵に合格しました。五月二十二日、衛生兵教育のため大同の陸軍病院へ中隊から十二名を引率して行きました。

二十四日大同着、警備しながら教育を受け教育修了、二十九日大同発、部隊のあつた永定荘へ復帰、第一中隊へ編入しました。昭和十八年秋季冀西作戦があつたが、私は残留し靈邱れいきゅうに行きました。

その後討伐に出たのですが、私は討伐男と言われませんでした。討伐があれば衛生兵は必ず同行しなければならぬ。宣撫工作もあり、大部分は八路軍(共産軍)討伐が多く、その後は廣靈くわうれいにも行きました。

五月廣靈発、大同、河南省陝県から討伐に出る。戦闘、戦闘の連続だが犠牲は比較的少なかった。しかし、

第三中隊が八路軍に攻撃され全滅した。我が中隊は救援に行きましたが、既に兵舎は焼かれてしまっていました。続いて大同、包頭ほうとうなどに移駐。

五月九日から六月二十一日、西北河南作戦に参加、再び第二次作戦にも参加しましたが、河南作戦では、だいぶ戦死しました。帰って来たのは半分ぐらいだったが、犠牲者は初年兵が多かった。また補充兵が多く死ぬ。叩き上げられた古参兵の犠牲は少なかったのです。

河南作戦で、洛陽攻略のときは特別挺身攻撃隊に加わりましたが、神風特攻ともいわれていました。とにかく、一日十八里（七〇キロ）歩くのだが、ほとんど眠らず四日間の連続です。歩くだけでなく戦闘しながらなのです。この作戦で独混部隊が先に前線に出て行ったが、独混旅団では逃げる敵を包囲するのに間に合わない。そのため、独混を追い越して敵陣を落として先に進んでいった。この命が我が第二十六師団に出たのです。

七月五日、警備交替のため包頭ほうとう出發。これが生死の

別れになりました。北海道へ行って本土防衛だというのが皆喜び、お土産まで買った。昭和十九年七月二十五日、朝鮮の釜山まで来たらストップ、十日以上経った。そのうちに蚊帳などが支給になり変だなど思いました。北海道に行くのに蚊帳は必要ないと。八月八日釜山を出帆した。

船の速度が遅い、船団は七〇隻ぐらいで、前後に航空母艦が二隻、駆逐艦が八隻以上でした。私の船は船足が遅いので後部の空母のそばにいました。

*七月二十四日、大本営は、南方軍・台湾軍・防衛総司令部（本土）・第五方面軍（北東軍）・支那派遣軍に比島方面決戦を捷一号作戦・連絡圏域方面決戦を捷二号作戦・本土方面決戦を捷三号作戦・北東方面決戦を捷四号とする捷号作戦準備を命令。

*八月十日、第四航空軍（比島）、捷一号作戦準備を下令。連合軍の比島来攻は迫ったことを示している。

我々は比島のレイテ決戦近しとは分からなかったが、我々が日本を救えるかどうかの時でありました。船団がバシー海峡にかかった夜、敵潜水艦の攻撃を受けたが危うくかわすことができました。船は一坪に十二人の鮫詰め、装具をはずし、その上に腰をかけても座れない人がいる。船倉に入れぬ人がいる。私は子供のとき、川で溺れたので泳げないから、救命胴衣を着けて甲板に出ていました。バシー海峡で夜が明けぬうち航空母艦も沈んでしまった。我が船は遅いので台湾へ逆航し、夜が明けてからまたマニラへ向けて航行した。

八月二十二日、マニラへ着いた船は四、五隻しかなかったように思います。兵員は少なくなり旧米軍の兵舎に入って休養しました。そのとき、私は独立歩兵第十三連隊第二大隊第六中隊に転隊しました。生き残りの兵隊だけ集まって、リングエンまで徒歩で四日くらいかかった。北支と違って暑いし、見るものも北支にない珍しいものばかり。山積みになっている砂糖をなめた者、バナナなど食べた者は赤痢になり下痢で苦しんで、体力を消耗し、ようやく生きて上陸したのに。

二十五日、マンガタレン着、比島ゲリラの第二期肅正討伐戦に参加し、マニラへ戻り、レイテへ行くことになりました。しかし部隊が海没したので兵員がそろわない。内地から補充兵が来るのを待っていたが、第二国民兵で、早稲田大学の焼印が銃把に押してある銃口が無く、銃身は単なる鉄の棒の擬銃を持って来た。したがって銃の手入れも知らない。これでは兵隊の員数だけそろえても駄目だと思いました。

我々はマニラの街の四階建ての本部にいたが、毎日二回ぐらい空襲がありました。陸軍病院は外にあるので、我々衛生部員は毎日病院まで通わなければなりません。しかし、マニラばかりでなく比島全土の治安は悪くなってきていました。しかし、まだ住民から襲われるまでにはなっていなかったが、物を盗まれることもあった。実際は住民より、我々が教練を教えた比島人の兵補の方が気味悪く、襲われはしないかと内心怖かったが、後には逆に襲撃されるようになりました。

十月十一日から第二次揚陸作戦に参加するなど、兵員補充部隊の充実を図っていきまして、部隊はレイテへ

四回ぐらい向かいましたが、米軍は我が軍の動向を常に監視していて、補充―出動―空爆の繰り返しでした。レイテ応援に行ったのは捨て札みたいなものでした。

最後に乗った貨物船は鉞^{びょう}打ちではなく、溶接でして一万二―三千人乗ったのではないですか。それまで、レイテの途中で船は沈没や座礁してしまふ。現地では救援の船をたのむと、我々の援軍を待っていました。大本営は「レイテは天王山」であると言っていましたから。船が沈没すると兵員は救助できるが、軍馬は船に残さねばならない。そのときの馬の泣き声が今でも耳に残っています。

レイテ島に先に上陸した者も、後から上陸できた者も、我が第二十六師団はほとんど全滅しました。また、マニラにもほとんど残っていませんでした。軍司令部はついにレイテを放棄し、決戦はルソン島へと移されました。

十一月二十幾日だったか、輸送船二隻は、レイテ島の北西、ルソン島南東端の中間にあるマスバテ島に上陸し、昼食を取ろうとしたら空襲を受け、船は沈没し

てしまいました。前にも申したように私は泳げないで、陸以外のときは救命具を着けていたお陰で助かりました。第二十六師団の兵員二万人が乗っていました。マスバテ島へ漂着できたのは四千二百人程度しかいなかったといひます。

内地―マニラ―レイテ救援と何回も試みたが、ほとんど沈没し、最後は師団の生き残り、四分の一がマスバテ上陸ということですよ。島によく泳ぎ着いて、浜に二時間程度いたが、空腹なので落ちていた椰子の実を食べた。そのため赤痢になって、一週間ほど苦しんで、下痢のため便所へ一日二十数回も行く始末でした。

そのころ、米軍から艦砲射撃を受け浜にいられないのでジャングルへ逃げ込みました。そのときは患者護送の担架は作ってあったが、私は衛生兵だから杖をつけて一里ぐらい逃げました。その間に不思議にも下痢が止まり、それから元気になりました。

私は薬は持っていたが、部隊の皆の薬だから私は飲まなかった。医薬品の補充がつかないのだから、どん

なことがあつても責任があるから自分では飲めませんでした。

生き残つた者も、デング熱・マラリア患者が多くなつたがキニーネなどはなかつたが、ロートエキス粉末を少し持つていたので、それで何人かを癒していました。ロートエキスは神様みたいな貴重な薬でした。デング熱で皆栄養失調になり、高熱のためか、何を食べても消化しない。その上シラミが多く、衣類が不足した。乏しい衣料だが原住民と食料・豚などと交換したり、生きるために強引なことをすることもあつた。原住民も我々も生きるための争いもありました。

私の周囲で最後に残つた者は三十七人だけになつてしまいましたが、その間、生き残りばかり集まると自然と部隊も何も無い。ジャングルの中に穴を掘り、土は防波堤のようにし、その上に木の枝を被せ、敵機から見えぬように擬した。数日すると枝が枯れたら新しいのと交換する。

そこに半月くらい生活していたら、ある夜突然海の方から数隻の船のエンジンの音がして目を覚ました。

夜が明けると六隻の艦船が我々に艦砲射撃を始めて、たちまち林は丸坊主になつた。人も皆やられ、残つた者は半分、三十人くらい残りました。

今度は、裏の方から日本語の軍隊用語が聞こえる。我々が教育したフィリピン人の兵補が、米軍に付いて来て、米軍の兵器を使って攻めてきた。初め友軍か敵か区別がつかなかつたが、直ぐ側まで来て敵であることが分かりました。こちらは、銃はあるが弾丸がない、撃つに撃てぬので着剣して突撃以外しかできない。しかも、我が軍には未教育の第二国民兵もいるので役に立ちません。

結局、一カ所のジャングルを六〇センチぐらい伐り開いて逃げるより仕方ない。夜が明けて一カ所に集まり、防毒面を集め火を付けて焼きました。そこで次のような申し合わせをしました。

「お互いに手榴弾一発は自決用に残せ（二発持つていたから）」「傷ついて他人に迷惑がかかるようになってから自決しよう」「食料は微発する以外にない、命のある限り助け合おう」「自隊以外の者であっても協力

し合おう」、このように誓い合いました。

それからは横井さんみたいな生活を約一カ年しました。椰子の葉で草履を作る。皆が一カ所にいると敵に見付かるので何カ所かに分散しました。私の所には十五人くらいで、また、同じ所にいないで時々移動しました。途中には戦没者が倒れているが、暑さのため腐ってしまったので、衣類で日本兵だと区別が付く程度でありました。

食料の補給も貯蔵もないのだから何でも食べました。トカゲでも何でも皆で分けあって食べる。その間にけがした者で、動けなくなった人は自分の戦友に穴を掘ってもらい、皆戦友が周りに集まりお別れをして自決する。それがつらい。遺骨は取らない。たとえ取っても、自分がどうなるか分からないからです。夕方、夕陽が赤々と見える。そのとき、自分が最後に残ったらどうしようかと思いました。ですから夕陽を見るのが怖かった。日が経つにつれグループはだんだんと少なくなるとなる。海軍も陸軍も、階級もない。

*瀬ノ上さんは、そのとき、マニラに移ってからの

第二十六師団の名簿を見せてくれた。赤線の所のみは生き残りである。瀬ノ上さんの名前は、戦死広報が出たので、その名簿には記載されていない。「私には戦友会がなくて寂しい」との一言が印象的で私の胸を打ちました。

昭和二十年九月十六日、終戦のピラを山の中で見ました。十月二十二日、日本軍の参謀が来て「日本は無条件降服をしたから、アメリカに降服せよ」と知らせに来ました。我々は山から下りて、米軍の鉄條網の柵の中に入った。そのとき、島から一緒に入った者は全部で百名くらいだったと記憶しております。

我々は十月下旬まで頑張ったので、米兵が警戒しながら同行し「兵器は山に束ねて埋めてこい」と命令された。広場で服装や身体の検査を受けたが、針、ホークまで取り上げられ、体に触るときは拳銃を突き付け警戒をしていました。

食事は飯盒の蓋にスープ一杯だけ、降服しなかった

からとの罰だったし、住民からいろいろと報告、密告などがあつたからかもしれません。十月二十六日にレイト島タクロバンの収容所に入れられました。折畳式の簡単な寝台で寝る。毎日使役に出されるが、栄養失調なので寒くて仕方がない。作業は、自動車の洗浄、兵舎の掃除などですが、兵舎掃除のときは米兵のタバコの吸い殻を拾い、ランニングシャツの上から入れ、パンツの所で溜つたのを持つて帰り皆で分け合いました。収容所での部隊戦友同志の話は「生き残つた我々は、故郷に帰つても昼は帰れない。もし遺族に会えば、『家の子供はなぜ帰つて来ないか』となじられるであろう。親の立場ではそう思うだろう」「帰つても、家族や近所の人々にこの悲惨な細かい事は言えない」と、日本にいるほとんどの人がこんな状態だつたことは知らないだろうと思つたからでした。

私は昭和二十年十二月三十日、家に着いたが、収容所では、栄養失調三期で、体も瘦せて骨ばかり、腕も握れるほど瘦せてしまつていた。人相がまるで違つていた。それには家には戦死の広報が入つているので、私

を信じてくれない。家の者は本人ではないと思つてゐる。しかし、それにしても、割合にはいろんなことを知つてゐると半信半疑であつたようです。家に入れてくれない私を隣の人が「長いことないから自分の子供のつもりで面倒見てやれ」と言うことでやつと家に入れてもらえました。とにかく、浦賀港に上陸してから、水も乾パンも食べていないから幽霊だと思つたのも無理ありません。

帰宅後、湯飲み半分の飯を食べたり、餅を雑煮にして食べたりして徐々に体力を回復し、やつと自分であると認められたという、嘘のような本當の話であります。

昭和二十一年春、呼出しがあり、中部第四部隊で、泉部隊（第二十六師団）の生死不明者などが分ならず、兵籍簿整理に行きまして、少額ではあるが報酬を頂きました。しかし、十九年八月マニラ上陸以降の給与はもらつていませんでしたので、私自身が軍隊で預金した金は全部、線香とローソクに換えて、帰国後御遺族のお宅を回つて歩きました。

六月付けで辞令が出て、元勤めた大八村役場へ行き、高山社や、片倉製糸の養蚕技手となり、さらに入生川一村の県農協に勤め、昭和二十五年九月二十八日岐阜県高山蚕技術指導所の技術普及員、三十年三月、岐阜県農林部の技師を退職しました。

九死に一生を得て今日あるのは、士族だった父親の教育、しつけが厳しかったため、そのお陰だと感謝している。したがって、第二補充兵の苦労は知っているので、あまり酷^{きつ}しいことはしなかったし、マスバテ島での自活中も公の業は私のために使わなかった。また、戦友相助け合って生き帰ることができましたが、部隊のほとんどの将兵は比島あるいは海域で戦死したことは永遠に忘れることができず、御冥福を祈っております。

バタン半島・

コレヒドール島従軍記

神奈川県 川島増造

昭和十三年四月、徴兵検査で甲種合格となり、昭和十四年一月十日に横須賀重砲連隊第二大隊第三中隊第六班に入隊しました。中隊長は大井勇三大尉(陸士卒)。頭に軍帽、腰に剣をつけて初年兵の第一歩を踏みだしました。

一般教育訓練後、一般兵、通信兵、観測兵に分かれ、小生はその観測兵になりました。任務は二十四センチ榴弾砲の射撃諸元を、観測所で目標陣地の座標方向・射角・距離等を三角法を駆使して測定し、その測定値を速やかに砲列に伝える任務を持っている。訓練は横須賀地区の島山、衣笠山、大楠山、安神隊などの山々を重量物の野戦重測速機並びその脚を背中に背負って駆け回り、誠に過酷な訓練で、疲労困憊の極に達し、